

BOOKS
80

外から見た日本文学

佐伯彰一

TBSフタニカ

29

外から見た日本文学

佐伯彰一

TBSフリタニカ



著者紹介

佐伯彰一（さえき・しょういち）

1922年東京に生まれる。1943年東京大学文学部卒業。現在、東京大学教養学部教授、文芸評論家。主な著訳書、『内と外からの日本文学』『日本人の自伝』『物語芸術論——谷崎、芥川、三島』、ヘミングウェイ『日はまた昇る』（翻訳）。



外からみた日本文学

BOOKS'80

1981年11月25日 初版第1刷発行

著者——佐伯彰一

発行者——吉田 稔

発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ

〒102 東京都千代田区三番町28番地1 秀和三番町ビル

顧客サービス (03) 238-5711

電話 販 売 (03) 238-5721

振替 東京1-131334

印刷——祥文堂印刷所

製本——大口製本印刷

©Shouichi Saeki, 1981

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0391-123029-4968

外から見た日本文学——目次

第1章 知られざる国の文学

「キモノを着たガリヴァー」 『タイム』記者の眼 辺境

芸術としての日本文学 片貿易の文学常識

第2章 現代日本文学の死角

現代作家の外国語訳 「自然主義作家」谷崎潤一郎

見過ごされてきた特質 「肉体」と「自然」に対する態度

第3章 発見のドラマ（Ⅰ） 日本文学研究の夜明け

日の目を見た「封印」の書 鎖国の下でのジャパノロジー

日本語学の師・チェンバレン 「第三者」の手厳しい評価

第4章 発見のドラマ（Ⅱ） チェンバレン『日本事物誌』をめぐる

『日本事物誌』が伝える日本文学の消息 アーネスト・サ

トウが残したキリシタン文献の遺産 対照的なウイリア

ム・アストンの態度 外へ向ける日本人の努力

第5章 発見のドラマ（Ⅲ） アストン『日本文学史』をめぐる

『源氏物語』の評価 西鶴、近松から近代文学まで

三上・高津『日本文学史』との奇妙な符合 フローレンツ
の『日本文学史』

第6章

「本当に解かるのか」俳句の影響力

「分かってもらえない」という固定意識 文化の壁

国境を越えた「ハイク」 欧米文学に与えた衝撃

第7章

時代の「壁」は超えられるか 崎人翻訳家の功績

文学にとっての時の試練 平安朝文学が外国人を魅了する

秘密 アーサー・ウェイリーの訳業 天才翻訳家の知ら

れざる側面

第8章

ノーベル賞以後

川端康成受賞のあとさき サイデンステッカー訳『源氏物

語』の新生面 太平洋戦争のもう一つの「戦果」 開か

れた日本文学の未来

あとがき

索引

図版協力

日本近代文学館

東京大学・アメリカ研究資料センター

学習研究社

佐伯彰一

装幀

TIC+国東照幸

第1章 知られざる国の文学

「キモノを着たガリヴァー」

一九四五年の日本敗戦からさほど間もないころ、アメリカの週刊誌『タイム』でふと目にした記事が、まことに印象鮮烈、三十数年後の今も忘れ難く残っている。

いったいに現在と違って、『タイム』誌なるものが、物珍しい時期であった。今なら近所の書店で、日本版『タイム』が手軽に買えるからで、わが国の雑誌並みの身近さだが、三十数年前は大違いで、仮に読もうとしても、めったにお目に掛かれるものではなかった。占領軍（当時は、進駐軍という呼び名が通用していた）の兵士と知り合ってもらい受けるか、さもなければ、そのころようやくわが国の幾つかの都市に作られ出した、いわゆるC I E ライブラリー（現在の「アメリカン・センタ―」の前身）にわざわざ出向きでもするほかなかった。思えば、現在とはまさしく反対の、いわば情報ハングリー時代、特に文学・芸術についての外国情報は、格別乏しく、ほんのちよつとしたニュースや書物までが、輝かしい希少価値の後光を放って見えるような時代であった。それだけ、わず

かに目に触れ、手に入る一切が、ことごとく新鮮な衝撃力をはらみうる、一面みずみずしい至福の時期とすら呼べるだろう。

『タイム』のその記事というのは、今も忘れないが、「キモノを着たガリヴァー」という奇警な見出しで、なんと芥川龍之介の写真が大きく載っていた。たとえば、敏感博識の読者は、もう見当を付けられたに違いない。わが芥川を『ガリヴァー旅行記』のスウィフトになぞらえているのだから、これは芥川のあの空想的な風刺小説『河童』を取り上げた記事ではなかったか、と。

まさしくご推察のとおりであるが、ここでぼくの『タイム』とのかかわりについて少々触れさせていただく。ぼくがこの雑誌に初めて出会ったのは、敗戦直後の佐世保においてであり、そのときのぼくは、既に消滅しかけた帝国海軍の「リエゾン・オフィサー」なるものであった。「連絡将校」という名前は、もっともらしく仰々しいが、実のところは、使い走り、雑用役の通訳にはかならない。日ごと日本軍隊の復員状況や基地の武装解除などの報告をさせられるのはまだしも、占領軍宿舎の水洗便所を作る指図役までやらされたのであった。

敗戦の当時、さいわい内地にいたぼくは、一応復員して、故郷の北陸の山村に引き揚げたのだが、間もなく一通の電報で呼び戻された。「タダチニサセボチンジュフニシユットウセヨ（直ちに佐世保鎮守府に出頭せよ）」というので、全面降伏した日本海軍から今更命令されるいわれはない。こんな電報は無視するにしかずと考えたが、他方、この出頭命令はそのまま聞き流すにはもったいない一種

FOREIGN NEWS

however, did not welcome Pakistan with the wild enthusiasm that swept the new dominion of India (*see above*). After all, Pakistan was the creation of one clever man, Jinnah; the difference between a sick political trick and a mass movement was apparent in the contrast between Karachi and New Delhi.

JAPAN

Gulliver in a Kimono

In the days of the late Greater East Asia Co-Prosperity Sphere, the "bazzaaz" of sword-drawing Japanese drowned out their more intelligent countrymen. The world of the 'joes and the 'cos had no chance to learn that modern Japan has also produced a fair quota of writers, thinkers and even humorists. Last month the work of one of them, a 20-year-old novice called *Kappa*, was first published in English translation. To American readers, Ryunosuke Akutagawa's satire seemed almost too good to have been written by a Japanese.

Akutagawa's *kappa* are a race of Oriental leprechauns, seldom over three feet tall, with short, ugly faces and webbed hands and feet. Like chameleons, they can change the color of their skins at will. Other *kappa* marks are large beaks and kangaroo pouches.

For later *kappa* women, a good man was harder to find. Under a firm system of courtship in reverse, the *kappa* had to chase and capture their husbands. In these efforts they were often assisted by parents, brothers and sisters. ("Oh, how miserable the be-*kappa* is!")

The only uncaptured *kappa* man was Mag, the philosopher, who was too ugly and stayed inside his house almost all the time reading books in a dusky room lighted by a seven-color glass lantern. When No. 23 congratulated him on his bachelorhood, Mag sighed, said wistfully, "It's quite natural that you don't see how we feel, because you are not a *kappa*. But occasionally I myself desire those dreadful she-*kappa* to run after me."

Among *kappa* families, birth control has been greatly refined and democratized. Just before birth the father calls in a loud voice to his unborn child to see if it wishes to enter the world. If the answer is no, the midwife injects some liquid into the mother's abdomen which promptly shrinks to normal size.

Workers Come Cheap. Parts of Akutagawa's book might have come from Dean Swift. Accompanied by Gael, "a capitalist of capitalists," No. 23 visited some *kappa* factories. His guide told him that each month the *kappa* invent seven or eight hundred new machines which throw 40 or



AKUTAGAWA
"Oh, how miserable!"

eating *kappa* meat pure sentimentality, since everyone knew that in Japan girls from poor families were regularly sold to brothels.

芥川龍之介を取り上げた『タイム』の記事 (1947年8月25日号)

の冒険、青春彷徨(ほうこう)への誘いのような気もしたのだ。少々けんのんで、先が知れないといういちまつの懸念は付きまとったものの、そのまま故郷の山村に閉じこもっていても仕方がない。ともあれ行ってみよう、と、潔く出掛けたのだが、なにしろ敗戦直後のことで、富山から佐世保までの旅行というのも容易な話ではなく、故障が続出、一時は途中から引き返しかけたほどである。

だいいち、富山駅で待っていても、着く列車がどれも満員で、到底乗れそうにない。若い駅員が同情してくれ、「いくら待っていても同じだから、何とか押し込んであげよう」と、既に超満員の客車の窓へとぼくの尻(しつ)を持ち上げ、押し込んでくれるという哀れな旅立ちであった。そのまま座るところか身動きもままならぬ立ち

ん坊のまま、やっと大阪までたどり着いてみると、今度は山陽線が不通という。折からの台風と大雨で、ずたずたとぎれてしまい、当分復旧の見込みも立ちそうになかった。数日ぶらぶらしていると、にわかには飛行機の空席が一つ出来た、すぐにこれで飛べという命令を受けた。

何やらピカレスト小説みたいに、出たとこ勝負の九州行きであったが、佐世保に到着すると、即日「リエゾン・オフィサー」という、アメリカ軍発行の英語の身分証明書を渡されて、全く急ごしらえの通訳誕生と相成った。もともと太平洋戦争さなかの英文科学生、いやまさしく戦争勃発の年（一九四一）に英文科に入学したという人間だから、会話能力その他実用英語にかけては、訓練のチャンスもまるでなく、お粗末極まるものだった。若さと度胸あるのみで、何とかやりしのでいたと言うべきだが、毎日の仕事そのものは、結構おもしろく、ためにもなった。

通訳としてしだいにくそ度胸のようなものが身に付いていったというばかりでなく、そもそもこちらの専攻がアメリカ文学であった。戦時下の学生としては、風変わりな選択と言われそうだが、『白鯨』のハーマン・メルヴィルに熱中して、卒業論文にもこの作家を取り上げていた。アメリカの歴史もろくに知らず、それまで生身のアメリカ人と口をきいた覚えもないという有様だったから、およそ観念的、文学青年的な熱中ぶりに違いなかったが、敗戦国の「リエゾン・オフィサー」として日々接触させられた雑多なアメリカ軍人のそれぞれが、こちらにとっては、一種の実物見本、現実のアメリカとの触れ合いにほかならなかった。

『タイム』との初の出会いが生じたのは、こうした折である。アメリカの兵隊がよく読みふけているあの小型の雑誌は何だろうと、ふと手にして見ると、これが戦時版、軍隊版の、サイズもぐつと小さい『タイム』であった。初見参のこちらには、あの独特のタイム・スタイルは読みにくく、見出しから写真のキャプションさえ、分かりかねるものが多かった。しかし、初めて目にした記事というのが、おもしろいことに、アメリカ軍上陸直後の日本を扱ったものなのだ。その書き出しは、今でもよく覚えていいる。「敗戦後の日本、我々が現実に目にした日本について、最も驚くべきことは、起こったことよりも、起こらなかったことのほうにある。アメリカ軍の上陸以来、どれほど多数のハラキリが、またカミカゼ・アタックが起こるだろうかと心配されていたが、実のところ、どちらにも全くお目に掛かっていない」という文章が、いきなり飛び込んできた。

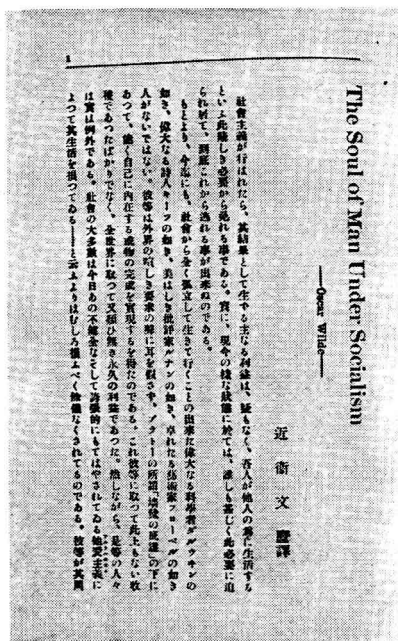
いかにも鮮やかな先制パンチと言うべきで、こちらは思わずたじろいだ。言われてみれば、なるほどそのとおりだと、苦笑しながらうなずくほかはない。戦争中の多くの日本人の言説また行動ぶりからすれば、敗戦に際して、何百何千とハラキリを敢行する人間が現れても不思議ではなかったろう。ところが、ごく少数の場合を除いては、ぼくら自身がびっくりするほど、そうしたケースは生じなかった。そうした点を、昨日までの当の敵のほうから、こうも手際よくやんわりと指摘されたのは、気恥ずかしいような、してやられたような、一種入り組んだショックを受けずにいられたなかったのである。

『タイム』記者の眼

そのころの『タイム』で、もう一つ印象的だったものに、「プリンス・コノエ」自決の報道がある。日米開戦直前の首相を務めた近衛文麿公が、戦争犯罪人として指名され、出頭を命ぜられた前夜（一九四五年十二月十五日）に自殺を遂げたとき、かなり詳しい記事が載ったのだが、なんとその冒頭に、オスカー・ワイルドという名前が出てきたから、びっくりした。

自決した近衛公の枕もとにワイルドの『獄中記』が置かれてあり、何か所か黒々とアンダーラインされていた、という。そして、「私は、時代に対して象徴的な関係に立っていた人間であって……」といった一節、また「世間は、私は余りに個人的であると批評したものだ。しかし、私の滅亡は、この人生における個人主義の過多によるものではなくて、むしろ過少から起こったものである」といった箇所がそのまま引用されていた。

敗戦の年の十二月半ばに起こった近衛公の自決は、何と言ってもショックな事件であったから、当時のわが国の新聞・雑誌でも大きく取り上げられていたが、ぼくの見た限り、こうした着眼や扱い方は、全くなかった。もったいぶった戦争責任論で、改めて戦前の近衛の政治的行動に批判を加えた新聞の「社説」、また、自決の直前に近衛公と話し合った人々の「談話」などまで幾つも



近衛文麿が発表したワイルド「社会主義論」の翻訳（『新潮』1914年5月号）

目に付いたが、こうした、いわば心理的・文学的なアプローチは、ただの一編も見当たらなかった。そこで、ぼくは改めて『タイム』記者のとらえ方のカメラ・アングル、そのスタイルの斬新ざんしんさに感心せざるを得なかった。もちろん、道具立てが少々ドラマチックにそろい過ぎ、出来過ぎている。下獄を翌日に控えた「プリンス・コノエ」とワイルドの『獄中記』という取り合わせといい、また、いかにもびったり、しっくりと当てはまるアンダーラインの引用ぶりといい、『タイム』記者による劇的な脚色の手がだいぶ加わっているのではないか、という気もしないではなかった。

しかし、ぼくの記憶をたどっても、青年時代の近衛はかなりの文学青年で、たしかワイルドの「社会主義論」（原題は「The Soul of Man Under Socialism」）を翻訳して、同人雑誌（第三次『新思潮』一九一四年五、六月号）に載せて発禁になったといった逸話も伝えられていた。そこで、『獄中記』と近衛という結び付きは、決して唐突でもなく不自然でもない。仮に作り話であるとして

も、よほどの事情通かまたは日本研究の専門家から情報提供を受けた上でのことに違いない。いずれにせよ、『タイム』記者の調査能力と構想力のしたたかさ恐るべし、と思わずにいられなかった。

ちなみにこれは、だいぶ後年の話になるが、この近衛「ワイルド重ね合わせのエピソードは、実は作り話どころか、しかと事実的な裏付けのある出来事であったことが判明した。元外交官の加瀬俊一氏にお会いした折うかがったところでは、氏の著書『ミズリー号への道程』の中で、戦争中に近衛公に頼まれて、ワイルドの『獄中記』を貸したという思い出を書かれたという。また、近衛自身によるアンダーラインの箇所への言及も、氏の記憶にはっきり残っている。『タイム』記者がこの挿話を加瀬氏から聞き出したことは間違いないと、ほぼ言い切ってよいだろう。

そこで、冒頭に触れた、芥川の『河童』紹介の記事というのは、当時のぼくにとつて、いわば第三の『タイム』ショックとも言うべきものであった。第一、第二と引き続いた後の体験であっただけに、単に素朴に驚いたり、たじろいだりしたわけではない。敗戦後における日本文学紹介としては、明らかにこれは最初の目覚ましい一撃に違いなく、その意味で、日本人として格別うれしくもあり、注目に値する事件でもあったが、同時に、この『河童』論全体に流れているトーンないしアングルの、ある心理的な引つ掛かりを覚えずにもいられなかったのだ。

「キモノを着たガリヴァー」といった見出しは、少々安っぽくて紋切り型過ぎるとしても、一般読者の注目を引くためと受け取れば、そのまま見逃すこともできる。しかし、この記事に一貫する

基調は、驚きであり、意外さの表白にあった。こんなに知的で洗練された風刺性の持ち主が、よくも文化的な後進国、野蛮国に棲息すくしていたものだ、なんと驚き入った話ではないかといった含意が、誌面に満ちあふれている。

いや、さすがにそこまではっきりと言い切ってはなかったが、当時のぼくとしては、この『タイム』の記者の内に、一種の文化的優越感をかぎつけずにいられなかった。一段高い所から見下ろして、皮肉をちらつかせながら語っている。芥川自身を揶揄やぶしているわけではなかった。作家としての芥川については、スウィフト、また『エレホン』のサミュエル・バトラーと比べ合わせながら、その詩的な持ち味を大いに認め、高く評価している。いや、むしろ芥川を手掛かりとし素材として、日本人に皮肉な一太刀を浴びせようとした。そんな感じを受けたのだ。

今から振り返ると、これはこちら側のいわば過剰反応のたぐいで、『タイム』記者にそこまでの下心があったとは思えない。敗戦以来も、根深くしみ込んだ日本人的な劣等感が、独り合点でたちまちうごめき出し、走りはじめた、と潔く認めるべきであろう。劣等感に悩まされる人間は、とかく過敏なアンテナを張りめぐらして、自分を見くださうとする相手の優越感の影を認めがちである。この『タイム』の『河童』評の本文は、今、残念ながら、ぼくの手にない。しかし幸い友人の斎藤襄治氏の「外国人の見た芥川」（『芥川龍之介案内』所収）というエッセーの中に、詳しく解説引用がなされているので、それによらせていただくと、この記事が載ったのは、『タイム』の一九四七

年八月二十五日号だという。同じ年の六月に、塩尻清市氏の手になる『河童』の英訳が刊行されたことに對するいち早い反応であった。

もちろん、芥川作品の外国語訳は、これが初めてというわけではない。話を英訳に限っても、既に戦前に、グレン・W・ショーによる『舞踏会』『手巾』『蜘蛛の糸』などを含んだ *Tales grotesque and curious* (怪奇短編集) の刊行があり、また、別の訳者たちによる共訳の作品集がその翌年に出ていた。しかし、いずれも日本の出版社から出て、どれほどの外国人読者の目に触れたかは疑わしい。『タイム』のように幅広い読者層を持つ雑誌が、あれほどの誌面を割いて、芥川の本を書評し紹介したことは、やはり画期的な事件とみなすべきだろう。

さて『タイム』記者はこう書いていた。すなわち、「大東亜共栄圏華やかなりしころ、刀を滅法振り回す日本人の万歳の声に押し流されてインテリたちは見る影もなかった。一九三〇年代、四〇年代の世界は、近代日本が相当な数の作家、思想家、それからユーモア作家さえ生み出しているという事実を知る機会に恵まれなかった」。こうした言い方にも、かつてのぼくは過剰反応を起こしたに違いないのだが、これは『タイム』記者の言うとおりと認めざるを得ない。

ひとり芥川と限らず、永井荷風、菊池寛など散発的な翻訳・紹介は戦前にもなされていたが、しごく片隅の狭くささやかな声にすぎなかった。「近代日本が相当な数の作家、思想家、それからユーモア作家さえ生み出しているという事実」自体、英語圏の大方の読者にとって目新しいニュース